

『墓の彼方からの回想』における古い

小 野 潮

シャトーブリアンの回想録『墓の彼方からの回想』は、四十年以上書き継がれており、当然その過程で、語り手は自らの老いに直面する。晩年に回想録を見直し、訂正を加えていく著者は自らの老いを鋭く意識する。そして、彼が壮年期に書く記述にさえ、読み返しの際に挿入された老年時の述懐が、以前になした記述と分かちがたく絡み合う。

この『回想』は、さまざまな時期に、さまざまな場所で書かれた。だから、私とその各々のときに目にしていたさまざまな場所を、物語を再び書き継いだ瞬間における自分の感情を、その都度示す序言が必要になる。こうして、私の人生の千変万化のさまざまな形が互いに入り混じることになった。〔…〕青春が老年期に入り込み、経験を積んだ老年の重々しさが青春期の軽々とした年月を悲しいものにする。〔…〕この『回想』を読み返しつつ、もはや私にはそれが茶色の髪の青年の手になるものなのか、白髪になった老人の手になるものなのかわからなくなる。〔序, I, p. 111〕¹⁾

1) 『墓の彼方からの回想』全体の邦訳は残念ながら存在しない。以下同書からの引用は、すべて拙訳による。出典表示は次の版による。Chateaubriand, *Mémoires d'Outre-Tombe*, 2 vol. Édition de Jean-Claude Berchet, Pochothèque, Livre de Poche, 2003, 2004. () 内に「巻・章・ベルシエの版の第一巻、第二巻の別・ページ」を記載する。たとえば、「L.3, chap. 2, I, p. 200」という記載は、「第三巻第二章、ベルシエの版の第一巻、200ページ」を意味する。

本論は、老いという主題が、『墓の彼方からの回想』というテキストに具体的にどのように織り込まれ、この類まれな回想録にどのような性格を与えているかをテキストに即して検証することを目的とする。

まず、「他者としての老人」がどのように表されているか、また「老い」が一般にどのように捉えられているかという観点から検討する。次いで、「老い」が自身に関わる経験としてどのように捉えられているか検討する。そして、最後に「老い」が、テキストを造り上げる要素として、『墓の彼方からの回想』という作品のなかでどのように働いているかを検討して論を終える。

I 他者としての老人

人間の成長の過程で、身近に接する老人として、両親、その同世代の親族が当然姿を見せる。シャトーブリアンの場合には母方の祖母ベデ夫人、その妹ボワティユル嬢、両親、母方の叔父ベデ氏などが例としてあげられる。父の老いについては次のように記される。「父は私に人生の苦悩を経験させた。父は年齢とともにますます陰鬱になっていた。老齢は身体だけでなく、魂も硬化させていった。」(L.3,chap.12,I,p. 217) 軍に入隊するシャトーブリアンに父親は言う。「私は年老いたし、病んでもいる。もう長くは生きないだろう。」(L.3,chap.14,I,p. 221) この際の父親の様子は次のように記される。「私は肉の落ちた彼の手飛びつき、そして泣いた。彼の身体は麻痺しかけていた。その麻痺が彼を墓へと導いた。父の左腕は痙攣し、それを抑えるため父は右手で左腕を押さえねばならなかった。」(L.3,chap.14,I,pp. 231-232)

老人は老いによって魂も身体も硬化し、しかも自分の老い先が長くないことを自覚する。同時に自分の老いを隠そうとする。

母の老いは、シャトーブリアンが目撃する限りではさほど陰鬱ではない。父の死去後、かつて住んでいたサン＝マロの町で老後をおくる母の生活は穏やかでさえある。「ときどき、昔からの友人が母の隠居所を訪れ、

母とかつてのよき時代について語り合った。私と差し向かいになると、母は即興で韻文の物語を聞かせてくれた。」(L.5,chap.4,I,p. 277)

しかし、穏やかな老後は、革命によって一変する。彼女が愛する長男は反革命容疑で処刑され、彼女もまた王族軍に参加して戦った次男の親族として投獄される。寸でのところで処刑は免れるものの、家族とも引き離され、親族の誰にも看取られず生涯を終える。「ド・シャトーブリアン夫人はもはや《女性市民》グイヨンの住居で亡くなった哀れな女に過ぎない。庭師と字も書けない季節労働者だけが、母の死の証人である。親族や友人はひとりもない。」(L.4,chap.5,I,p. 238)

母の老年は、打ち捨てられた人間のそれである。「老いる」とは往々にして、親しかったすべての者から見捨てられることである。

母方の祖母とその妹は、穏やかな老後を故郷のプランコエの集落でおくっている。「ド・ベテ夫人はもう歩けなかったが、それを除けば、老齡につきもののあらゆる不具合を免れていた。それは気持ちのいい、太った、色白の、清潔な、堂々としていて、みごとで高貴な物腰の老婦人だった。」(L.1,chap.4,I,p. 133) 姉妹仲はよく、妹はよく姉の面倒を見、ふたりの生活を活気づけるのは、隣家に住む昔からの友人との交流である。しかしともに老いた友人の輪もそこから欠ける人間が出てくると、その衰亡を眺めるシャトーブリアンに悲しみを覚えさせる。

これが人生で最初に私が出会った社交の集まりだったが、それはまた私の目の前から消え失せた最初の社交の集まりだった。平和と祝福が支配していたこの屋根の下に死が入り込み、その家を少しずつ寂しいものにしていき、ひとつひとつ部屋を閉ざして行って、それらの部屋がもはや開かれなくなるのを私は見た。(L.1,chap.4,I,p. 135)

叔父ベテの老年もまた悲しい。彼が叔父に最後に会うのは、王族軍の解散後、身体を壊して、叔父の居住地ジャージー島で世話を受けたおりであ

る。その後、母の死を報せると叔父が返事をくれる。「とくに彼が勧めていたのは、フランスに戻ったときに、兄に預けられていたベデ家の累代の称号証書を探すことだった。このように、この尊敬すべき亡命者に、亡命も、破滅も、近親者たちの抹殺も、ルイ十六世の犠牲も、革命について何も教えていなかったのだ。」(L.11,chap.6,I,p. 558)

衰弱した老人と対照的な姿を青年シャトーブリアンに見せるのは、兄嫁の祖父であり、かつてルソー、ディドロの保護者であり、後には国民公会で裁判を受けるルイ十六世の弁護人を務めるマルゼルブである。マルゼルブを彼は次のように描き出す。「彼は学識、誠実さ、勇気に満ち満ちていた。しかし彼は激情的で情熱的で、ある日、コンドルセについて私に次のように言うほどだった。《あの男は私の友人だった。今ならば、あの男を犬のように殺すのに何のためらいもない。》」(L.5,chap.13,I,p. 265)しかし、マルゼルブでさえ、老いた自分にできないことを認識せざるをえない。シャトーブリアンがアメリカ旅行を取行するのを励まししながら、自分については年齢を考えずにはいられない。「この高名な人物は私に言っていた。《もしもっと若ければ、あなたとともに私も旅立つだろうに。そうすればあれほど多くの犯罪、卑劣さ、狂気が私に見せる光景を避けられるだろうに。だが私の年齢では、自分がいる場所で死なねばならない。》」(L.5,chap.15,I,p. 309)

八十年にわたる著者の人生を語るこの書物に現れる老人の姿は以上に尽きるものではない。彼の前を横切る人物たちに見られる老いの姿を見ておこう。これまで見てきたように、「老い」とは「衰え」「病」「孤独」「諦念」「醜さ」である。

老いは身体の衰えとして姿を現す。昔馴染みの友人ボゲに再会したシャトーブリアンは友の衰えにしみじみとした感慨を抱く。「かつてのように、私は彼とあちらこちら出かけ始めた。彼の歩みが以前よりずっと遅くなったのを見て、彼も年老いたことに私はようやく気づいた。」(L.29,chap.6, II,p. 203) ローマ駐在大使として教皇レオン十二世の葬儀に立ち会う彼に

強い印象を与えるのは、枢機卿たちの老いさらばえた身体である。「葬儀委員を務める数人の老いた枢機卿は目が見えず、震える指で教皇の棺がしっかり釘付けされているかどうか確かめていました。」(L.30, chap.1, II, p. 272)

身体の衰えは往々にして「醜さ」となって現れる。「続いて現れたのは荷車に乗ったふたりの色黒のしわくちゃの老婆で、彼女たちがフランス女性の前衛を務めていた。彼女たちの様子には、プロイセン軍に回れ右させかねないものがあつた。」(L.38, chap.10, II, p. 800) 自分が登場人物として生み出した若い乙女であるアタラでさえ、この老いによる醜さを免れられない。「下り道のなかほどにある宿駅の宿の部屋で、私は自分の家族に再会した。六枚の版画に描かれたアタラの冒険が壁を飾っていた。[...] 可哀想なアタラ！ 彼女はとても醜く、すっかり老い、変わり果ててしまっていた。」(L.41, chap.2, II, p. 916)

しかし、老いは、身体的な衰えを齎すに留まらない。より深刻なのは、老いが精神的な麻痺を引き起こすことである。「老いる」と自分が生きている時代を理解できなくなる。先にベテ叔父について見た通りである。革命時国外逃亡を余儀なくされながら、まったく時勢の深刻さに考えが及ばない高位聖職者たちもそうした姿を見せている。「ほとんど死にかけの人間に見えるふたりの老人臭い司教が春にセント＝ジェームズ公園を散歩していた。ひとりが言った。《猯下、六月にわれわれはフランスにいるだろうとお思いになりませんか。》相手は熟考してから答えた。《もちろんです。猯下。そうやって不都合があるようには思いませんな。》」(L.10, chap.7, I, pp. 516-517) 貴族院議員として演説するシャトーブリアンは、その演説の内容には何の関心も示さず、老残の姿をそこにさらす同僚の姿を見て思わず吹き出してしまう。「ある日、演説者席のすぐ近くの議席の第一列は、いずれも負けず劣らず耳の遠い尊敬すべき貴族院議員によって占められていた。[...] 私は彼らを眠りこませてしまったが、それはまったく自然なことだった。貴族院議員のひとりが補聴器を落とした。隣にいた議員

が、その落下音に目を覚まし、礼儀正しく同僚議員の補聴器を拾い上げようとしたり。そして彼自身が椅子から転げ落ちてしまった。」(L.25, chap.2,II,p. 16) 教皇が亡くなり、新教皇選出会議に参集した枢機卿のなかにも、時勢から取り残され、しかもその自覚がなく、教皇庁の害になる人々がいる。「最後に第三の派閥に含まれるのは、前進も後退も望まない、身動きしない老人たちだ。」(L.29, chap.4,II,p. 200)

こうした人々のなかには、自分の役立たずを自覚せず余計な手出しをして、ものごとを台無しにする迷惑な老人さえいる。七月王政に対して陰謀を企て、シャトーブリアンの了承を得ずに、その陰謀の頭目として彼を担ごうとする人々について、彼は次のような嘲りの言葉を漏らす。「往々にして、松葉杖をついた人々が、崩壊する王国に挺入れをしてみせようなどと言い張ることがある。だが、社会の現状を見るなら、中世の遺跡を復興するなど不可能である。なぜなら、その建築物に活気を与えていた精霊がもはや死に絶えてしまっていたからだ。ゴシック的なものを生み出そうとしても年老いたものを生み出してしまっただけである。」(L.34, chap.13,II,p. 526) 時勢をわきまえない老人によるおせっかいは、ときとして致命的な悪影響を与える。それが、正統王朝を継ぐべきアンリ五世に対して、周囲の家族、周囲の老人が与える教育についてのシャトーブリアンの懸念である。「冬の夕べ、老人たちが炉辺で何世紀もの記憶を呼び覚ましながら、子どもに過ぎ去った日々について教えているのだが、その過ぎ去った日々の太陽を呼び戻すものはもはや何も存在していない。老人たちはサン＝ドニの年代記を、乳母がするおとぎ話に変形してしまう。」(L.41, chap.4, II,p. 925)

自分の老いを自覚した老人が示すのは自嘲である。それは七月革命後にプラハに逃れた王太子アングレーム公爵とシャトーブリアンのあいだの対話に典型的に現れる。彼に王太子は自分の日常を「どんどん老いさらばえつつある」(vieillottant) というたった一語で要約してみせる。(L.41, chap.5,II,p. 929)

もちろん、「古い」がすべて否定的であるわけではない。「古い」とは経験であり、知識でもある。これがシャトーブリアンはヴェネチアを案内してくれるガイドを高く評価する理由である。「私の案内人は、この町でもっとも年配のそしてもっとも学識に富んだガイドのアントニオである。彼はすべての宮殿、彫像、絵画を諳んじている。」(L.39,chap.5,II,p. 836)

次にあげる一節でも、老人の姿は決して否定的ではない。「老水夫は老いた耕作者に似ている。[…] 老水夫はさすらいの人生をおくったし、老いた耕作者は自分の畑を一度として離れたことがない。しかし老水夫、老いた耕作者のどちらも星をよく知っており、一方は畝を、もう一方は水脈を耕しながら未来を予言する。[…] 夜になると老水夫は船室に引っ込み、老いた耕作者は茅屋に引っ込む。どちらにとっても慎ましい住居だが、そこにいれば住居を揺るがす嵐も彼らの落ち着いた心持を乱すことはない。」(L.6,chap.2,I,p. 324) ここで、老人は経験を積みながら自足しており、その自足した生活を従容として受け入れながら、世界に不満を抱くことなく、世界と調和を保ちながら生活し、そして死んでいく人間として提示されている。

こうして、経験を積みながら知恵を蓄え、それを後続の世代に伝える老人の姿は当然尊敬すべきものである。「過去を軽蔑するのではなく、他の諸民族と同じように、われわれもまた過去を、自分がかつて見たことをわれわれの家庭で物語ってくれる尊敬すべき老人として扱うべきだろう。[…] 彼はその書き物で、その考えで、またその言葉遣いで、彼の振る舞いで、昔ふうの彼の服装で、われわれに教訓を与え楽しませてくれる。」(L.29,chap.8,II,p. 216)

こうして「古い」とはかつては「威厳」だった。それは、母方の祖母ベデ夫人が体現していたものである。ところが、彼はそうした時代を懐かしみつつも、もはやそれが終わったとも考えている。「当時は年老いているとは威厳があるということだった。現在では年老いることは重荷でしかない。」(L.1,chap.4,I,p. 134) なぜだろう。おそらくはフランス革命が原因

であり、それを契機として時間の流れが加速したせいであるらしい。以前、人間は生まれた土地に育ち、そこで老い、そしてまた次の世代が同じ土地で育ち、そしてまた老いということが繰り返されていた。しかし、十九世紀はもはやそのような時代ではない。「宗教心とやさしさに満ちた日々よ、あなた方はもう戻ってこない。そうした日々には、息子は父親や祖先が死んだのと同じ家、同じ肘掛け椅子で、同じ暖炉の近くで死に、父親や祖先がそうだったように、涙にくれる子や孫たちに取り巻かれて死んだものだった。」(L.11, chap.6, I, p. 559) シャトーブリアンの父親は由緒正しい自らの一族が財産を失い、土地を失ったのを嘆き、再び一族がこの引用で示されるような代々の暮らしを享受できることを目指してコンブールの城を購入した。しかし、長男は恐怖政治期に処刑され、次男のシャトーブリアンはほとんど流浪の生活をおくるようになってしまう。人間が親しかった人間に先立たれるのは十九世紀に始まる現象ではない。したがって、人間の老いが、親しかった人間に取り残されるという感情と結びつくのも十九世に始まる現象ではない。しかし、十九世紀の老人の孤独の原因はそれだけではない。上に見たように、「老い」のひとつの徴候は、「時勢」の変化を理解できなくなることである。しかし、その度合いは個人の適応能力の多寡だけでなく、時代の変化のスピードに影響される。そしてシャトーブリアンの生きた時代は、旧体制から革命期、総裁政府期、統領期、ナポレオン帝政期、王政復古期、七月王政期をわずか五十年程のあいだに経験し、それに応じてものごとについての評価がしばしば極端から極端に揺れ動く時期だった。「すさまじい速さで次から次へと襲ってくるできごとが、たちまちのうちにわれわれを老いさせてしまったので、過去の自分の振る舞いを思い出させられると、まるで自分とは別の人間についての話を聞かせられているような気になってしまう。」(L.43, chap.1, II, pp. 942-943)

失われたのは先立った人間だけではなく、自分に先立つ、かなりの永続性をもって続いてきた世界であり、その世界を統御してきた思想であり習

慣である。「かつての老人は、現在の老人ほど不幸でも孤立してもいなかった。[…] 現在では、この世に生き延びている人間は、自分が知っている人間が死んでいくのを見るだけでなく、自分が馴染んでいた思想が減んでいくのを見る。原理、習俗、趣味、喜び、痛み、感情、あらゆるものが、彼がかつて知っていたそれとは似ても似つかない。」(L.9, chap.10, I, p. 472)

シャトーブリアンが他者に見出す老いは、身体と精神の衰えであり、それは老いを醜いものとし、時勢から取り残されたものとし、ときとしては時代の進展を阻害させるが、その衰えのゆえに、哀惜の対象ともなる。世代から世代へと同じ暮らしが続いていた時代には、その哀惜の情愛は強かったが、十九世紀になって時勢の進展が激しくなって以降は、人間が威厳をもって老いることは難しくなり、老人の時勢への遅れは甚だしくなり、それによって自分を取り残されているという老人の感情は一層強まらざるをえなくなる。

II 自己の「老い」

他者の老いに観察される諸要素は程度の差はあれシャトーブリアンが自身について抱く感慨にも見出せる。年齢が進むにつれて彼も身体の老いについて自覚せざるをえない。ロンドン亡命の青年期に彼が恋していたシャーロットとの、壮年期になってロンドン大使として赴任していた時期の再会について述べた後、彼は次のように記す。

何度も私は、自分に対する疑いを晴らしにいこうと考えた。だが、私はイギリスへ戻れるだろうか。自分が墓地と定めた父祖の地も訪問できないほど身体が弱ってしまっているのだ。私は今や、あまりに激しい感情を抱くのを恐れている。時は、若かった歳月を奪い去り、私を、四肢を戦場に残してきた兵士のような者にしてしまった。血液は、もはや長い距離を駆け巡る必要がなくなり、大急ぎで私の心臓に

流れ込み、その速度がとても速いので、快樂、苦しみに反応するこの
古いさらばえた器官はほとんど破裂せんばかりの鼓動を始めてしま
う。(L.27,chap.11,II,p. 118)

しかし、彼が身体の衰えを嘆く記述は『回想』で多くはない。晩年に友
人たちに出した書簡では、身体の不調についての嘆きが繰り返されるのだ
が、そうした記述は『回想』において滅多に見られない。むしろシャトー
ブリアンは自分がその時点での年齢より若く見られたという挿話を好んで
語る。「最近、ある司祭が私と知り合いになりたいと願っていた。彼は私
を見て口をきけなかった。ようやく口を開くと、彼は叫んだ。《ああ、あ
なたはまだ長いあいだ信仰のために闘うことがおできになるでしょう。》」
「私同様旅をしていたブラウンシュヴァイクのドイツ人が、私の名前を耳
にして、駆けつけてくる。[……] 彼は私の《若さ》に驚きっぱなしだった。
[……] 《でも、それは私の判断違いです。あなたの最近の著作を見るなら、
私はあなたが今私に見えているのと同じくらい若いと思わなければならな
かったのです。》」(L.38,chap.8,II,pp. 791-792)

「古い」による精神の衰えについて、彼はこれを自身にほとんど認めな
い。むしろ、確かに自分は年齢を重ねたが、それでも精神はまったく老い
ていないと強調しようとする。七月革命に際し、新国王ルイ＝フィリップ
に忠誠を誓うのを拒否し、貴族院議員の職を辞した彼は自分の政治的経歴
はその時点で終了したと思い込む。しかし、彼が正統王朝の後継者として
支持したボルドー公爵（アンリ五世）の母親に当たるベリー公爵夫人がフ
ランスに潜入し、蜂起を試みて失敗し、政府に逮捕投獄されると、彼は彼
女の救出のための活動を始める。「だから、よく訓練を受けた古参兵士と
して、私は戦列に馳せ参じ、私の上官のもとで進軍を始めようとしてい
た。権力側の意志によって、一対一の決闘を受け入れざるをえなくなった
私は、それを受け入れた。」(L.35,chap.24,II,p. 638) 自分の老いを百も承
知しながら、彼は自分が戦闘心を失ったとは微塵も考えていない。彼は失

脚したブルボン家やローマカトリック教を攻撃する『ネメジス』という詩を書いたバルテレミーに宛てた書簡を引用する。「時が私から引き抜いたのは髪だけです。それは時が冬に木々の葉を落とすのと同じことで、木々の幹のなかにはなお樹液があるのです。」(L.34,chap.12,II,pp. 523-524) 自分と若者を比べながら、自分が若者以上に時勢を正しく認識していると彼は感じている。「自分の能力が何ひとつ老いてなどいないのを私はしっかり感じている。これまで以上に、私は自分が生きる世紀をよく理解している。私は誰よりも大胆に未来へと踏み込んでいく。」(L.34,chap.3,II,p. 497)

しかし、彼にも老いを痛切に自覚せねばならぬ場合がある。シャトーブリアンは華々しい女性関係で知られ、年配になっても若い女性の誘惑を止めようとしなない。そうした彼でさえ、文通をしていた若い女性と実際に会うことになると、自分の年齢を改めて感じざるをえない。「私は彼女を自分の腕に抱きかかえて、その家まで連れて帰らねばならなくなった。あんなに恥ずかしい思いをしたことはない。私の年齢になって、一種の愛情を感じさせるなどというのは、まさにお笑い草だと思われた。こんな奇妙なことが起きて、自分が浮かれた気持ちになればなるほど、当然それはからかいだと思われ、私は自分が侮辱されたように感じた。」(L.31,chap.1,II, p. 349)

女性とではなくても、若者との接触は老いを痛切に感じる機会となる。旅行中にドイツ人青年と出会った彼は、自分の老年とドイツ人青年の若さを取り換えることを夢想する。「もしその学生が私の長椅子付きの馬車、そして、栄光を運ぶこのうえなくたちの悪い私の馬車と彼の若々しい両脚を取り換えてくれるなら、私はどれほど喜んで、彼の杖、灰色のシャツ、金色の髭を自分のものにするだろう。私はローヌ峡谷の氷河に行くだろう。自分の恋人にシラーの言語を語りましょう。そして私は甲斐もなくドイツの自由を夢見るだろう。私と入れ替わった学生のほうがとよえば、時のように老いさらばえ、死者のように退屈しきって、経験によって幻想か

ら醒まされて歩いていこう。」(L.35,chap.11,II,pp. 599-600)

若い人間との出会いと並んで、彼に自分の老いを痛感させるのは、かつて自分が見た土地、かつて自分が知っていた人間の老いた姿に再び接することである。そうした場所とは、かつて十代の士官だった時代に滞在し、ナポレオン期パリ退去命令を受けた折に四十代で滞在し、七月革命が勃発したという報せを一八三〇年に六十一歳で受けたディエップの町であり、貧窮の亡命生活をその地でおくり、後に大使として赴任したロンドンであり、一八〇四年に三十代で教皇庁付きの大使館書記官として赴任し、さらに一八二八年六十歳近くになって今度は大使として赴任するローマの町であり、一八〇六年に地中海周辺を巡る旅への出立時に滞在し、七月革命後にプラハに魔王シャルル十世に会いに出かける前に、ベリー公爵夫人に呼び出されて滞在したヴェネチアの町である。そうした場所に赴くたびに彼はかつての自分と現在の自分の対照に誘われざるをえない。ナポレオン帝政期にパリからの立ち退きを命じられ、ディエップの町に赴いたシャトーブリアンは、士官としてその地で勤務していた時期を思い出し、その時期と現在を対照する。そしてディエップで滞在する部屋の窓から海を臨み、その海の眺めは、故郷のサン＝マロの海、アメリカ旅行の際に越えた海、イギリスに滞在するために越えていった海、地中海周辺を巡る旅に出かけていった際に越えた海にまで、彼の回想を運んでいく。「一七八八年に私は当時所属していた連隊の第二中隊とともにこの町に駐屯していた。家々が煉瓦ででき、商店が象牙でできている清潔な街路があり、明るい陽光に溢れたこの町に住むのは、自分の青春時代に退避することだった。[...]家にいると、そこからは海が臨まれた。座ったテーブルから海を眺めていたが、その海は私の出生を目撃し、私があれば長い逃亡生活を耐え忍んだイギリスの岸辺を洗う海だった。私の視線は自分がかつてアメリカまで連れていき、再びヨーロッパに打ち捨て、さらには私をアフリカとアジアの岸辺に運び去った波を眺めわたした。」(L.1,chap.6,I,p. 152) イギリス大使職を終え、ドーヴァーの港からフランスへ戻る自分の姿を一八三九年

に思い浮かべるシャトープリアンの脳中では、彼がイギリスへの亡命生活から一八〇〇年にフランスに戻ったときの自分の状態、一八二二年にロンドン駐在大使職を終えてヴェローナ会議にフランス代表として赴こうとしていたときの自分の状態、そしてそのふたつの時期のことを思い出している時点での自分の状態が三重写しになって思い浮かべられる。「私は一八二二年九月八日、それより二十二年前にそこからヌーシャテルの住民である《ラサーニュ氏》²⁾が出帆したのと同じドーヴァーの港で乗船した。この最初の出発から、私がペンを握っている現在の時点まで、三十九年の歳月が流れ去った。自分の過去の人生を見つめ、それに耳を傾けると、一隻の船も浮かんでいない海の上に、もう姿の見えない船の水脈を見るような気がする。」(L.27,chap.11,II,p. 119)

彼を現在の自己と過去の自己の対照に誘うためには同じ場所を通過する必要さえない。「月」の眺めや「天空の星」の眺めがそうした土地と同等の役割を果たしてくれる。「その時刻〔＝夕刻〕には私の青春時代が甦ってくる。時が実体のない幽霊に変えてしまった日々を、青春時代が甦らせるのだ。星々が蒼い天を貫いて光輝くと、私はアメリカの森の懐から、大洋のただなかから嘆賞したあのすばらしい天空を思い出す。〔…〕夜が旅人に見せるのは星々だけであり、星々は同じ半球のさまざまな場所で同じように見える。だから、旅人は、彼がこれこれの国でこれこれの時期に見たその同じ星々がそれとわかるのだ。彼が地上のさまざまな場所がかつて抱いたさまざまな思い、かつて感じたさまざまな感情が甦ってきて、天の同じ点に結びつく。」(L.36,chap.1,II,p. 652)

先にあげたボゲとの再会が既知の人物との再会の一例だが、長い生涯を生きた場合、そうした再会の機会は数多い。そのなかでも劇的なものは、かつてイギリス亡命期間中に恋仲となったシャーロット・アイヴズとのイ

2) 「ラサーニュ」は、一八〇〇年にシャトープリアンがイギリスでの亡命生活からフランスに帰国した際に用いていた偽造旅券に記されていた彼の偽名。第一二巻第六章を参照されたい。

ギリス駐在大使時代の再会であろう。思いがけないこの再会の機会について語りながら、この再会時の感慨を彼は次のように記す。「以上が、私とアイヴズ嬢の物語である。語り終えながら、私は、最初にシャーロットを失ったのと同じこの島で、再びシャーロットを失いつつあるような気がしている。しかし、今私が感じていることと、私が当時抱いたやさしい気持ちを出しつつある時期のあいだには、無垢が隔てる長い時間がある。アイヴズ嬢と語らった時期と、サットン夫人に再会した時期のあいだには、いくつもの恋愛が積み重ねられた。」(L.10, chap.11, I, p. 532) 既知の人間との再会の機会は、以前の出会いの時期と再会の時期の自分の状態の変化の確認の機会であり、せつかく再会できたその人間が再び自分から失われることの確認の機会ともなる。もうひとりここで取り上げておきたいのはアルトワ伯爵、後のシャルル十世についてである。魔王となりプラハに滞在するシャルル十世についてシャトーブリアンは「老王」「老君主」「老王侯」という表現で何度も語るが、彼が初めて後のシャルル十世を目撃するのはまだフランス革命が勃発する前の時期、故郷のサン＝マロにおいて若く光り輝く王子アルトワ伯爵を目にしたときだった。「私は若き王子が海辺の群集のなかにいるのを見た。輝くばかりの彼と、まったく無名の私に、その時点では知られぬどれほど数奇な運命が秘められていたことか！ […] サン＝マロの町が目にしたフランス国王はわずかふたり、すなわちシャルル九世とシャルル十世のみである。」(L.1, chap.5, I, p. 150) 回想録のほとんど劈頭とも言っているいい位置における若々しいアルトワ伯への言及は、巻末近い位置における魔王シャルル十世との著しい懸隔において、時の経過を読者にしみじみと感じさせる効果を持つ。シャルル十世のこのサン＝マロ訪問については後にもう一度話題にする。

それでは、老いを自覚せざるをえないシャトーブリアンが老いについて漏らす感慨はどのようなものだろう。繰り返し述べられる感慨が三つある。ひとつは、もはや自分には時間が残されていないというものである。ボゲとの再会を語る末尾には次のような言葉が記される。「私も彼もどち

らもうそう長くはテヴェレ川が流れるのを見てられない。」(L.29, chap.6,II,p. 203) ローマ大使在任中に受け取った若い友人ティエリからの書信への返書に彼は次のように記す。「ご存じのように、私はあなたがローマにいてくださればいいと心から願っています。そうすれば、私たちは廢墟に並んで腰をかけ、そこであなたは私に歴史を教えてくださいました。老いた弟子である私は若い師に耳を傾け、自分に師の教えを生かすのに十分な歳月が残されていないことだけを残念に思うでしょう。」(L.29, chap.14,II, p. 253)

もうひとつ老いた彼が漏らす感慨は、自分がかつて魅力を覚えていた事物にもはや魅力を感じられないことである。彼はローマの町に魅力を覚え、大使としてのローマへの赴任を提案されたときにはこれを喜んだ。ところが実際ローマに赴任してみると、その町に彼はもはや魅了されない。友人ヴィルマンへの返書に彼は次のように記す。「このホームシックは、かつての自分と同じようにものを見る目を私から奪う、私が重ねてきた年齢に他なりません。廢墟と化した私は、ローマの廢墟を眺めて心慰むほど偉大ではないのです。今となつては、諸世紀の残骸のただなかを散歩しても、それらは時の経過を測るための物差しとしてしか私の役に立ちません。過去へ遡っても、そこに見出されるのは、私がすでに失ったもの、そして、私の前方にわずかに残った未来の切れ端でしかありません。」(L.29, chap.10,II,p. 221) ローマ駐在大使職に赴任する旅の途次で、マッジョーレ湖を目にしたときの彼の感慨も同様である。「一八二二年ヴェローナへ旅したときに、イタリアは私にとってすでに輝きを失っていたが、今年一八二八年にはイタリアはさらに色褪せたように見えた。私は時の経過を実感した。[...] 城がのこぎり壁で縁取るこの風景ほど甘美なものはない。だがこの光景は私に喜びを与えず、何の感興も与えなかった。」(L.29, chap.2,II,p. 188)。かつて喜びを与えたものがもはや自分を喜ばせない原因は、そのように周囲を眺める自分に若さがないことである。上の感慨には次のような一節が続いている。「人生の春ともいふべき青春の歳月は、

見る者の青春に、胸に溢れる期待を結びつける。若者は自分が愛するもの、そこには幸福の思い出とともに放浪する。彼がいかなる絆も持たなくても、彼はそれを探し求める。〔…〕幸福についてのさまざまな思いが彼の後を追う。魂のこうしたあり方が、彼が見る対象に反映される。』(Ibid.) こうして、実際には生きるのに難かった亡命の時期でさえ、後になってそれを思い出す老いた彼にとっては魅惑の時期になる。それはそこに「若さ」があったからである。「私たちはこの外国の地で、自分たちの集まりを持ち、気晴らしを持ち、祭典を有していなかっただろうか。そして何より私たちには若さがあったではないか。」(L.6, chap.1, I, p. 318)

老いた彼が最後に痛切に感じるのは、同時代の人々からひとり取り残されてしまったという感慨である。叔父との別れを語るシャトーブリアンは同時に、自分が母にも、姉のジュリーにも、兄にも二度と会えぬ運命であることを嘆く。「あのすばらしい母と私は離れ離れになってしまっていた。私は母を二度と見られぬ運命だった。私は姉のジュリーとも兄とも離れ離れになっていた。〔…〕そして今、私は叔父と別れようとしていた。」(L.10, chap.3, I, pp. 503-504) ロンドンでの亡命生活を振り返る彼がその不在を嘆くのは従兄であり、彼の苦境を救ってくれたベルティエである。「私の従兄ド・ラ・ブエタルデはもはやそこにおいてプルターニュ高等法院判事の赤い法服を着て私のおんぼろベッドの上でバイオリンを弾いてはくれない〔…〕。もはやベルティエがそこにおいて、クリストフ王の金で私たちに夕食を振る舞ってくれることもない。そしてとくに若さという魔女がそこにはもはやおらず、微笑みで貧しさを宝に変えてくれることもない。」(L.34, chap.8, II, p. 511)

彼は自分を、ひとり地上に取り残され、ともに生きた人々の鬼籍簿に彼らの名を記しながら、最後には自分の名前を鬼籍簿に記してくれる人間も得られない存在として思い浮かべている。「この『回想』は私が付けている鬼籍簿のようなものだ。死者を記録することを運命づけられていた私だが、もう何年か経ったら、不在になった人々の名簿に私の名を記すべきひ

とを誰も自分の後に残さないということになってしまうだろう。」(L.11, chap.4,I,p. 552)

彼のこうした感慨を圧倒的な迫力で示しているのが、一八三三年にヴェローナに立ち寄ったときに、かつて自分がフランス代表として参加した一八二二年のヴェローナ会議に参加した人々へおこなう呼びかけである (L.39, chap.3,II,p. 826)。自分とともに、そこでヨーロッパの行く末について議論をしたロシア皇帝アレクサンドル一世を始めとする人々に彼は点呼をおこなうのだが、それに対して帰ってくる返答はすべて「死去」というものである。

彼は自分の身体についても精神についても老いを認めようとはしないが、しかし若者との接触、過去との遭遇、そして何よりともに時代を生きてきた人々がもはや不在であることから自身の老いを自覚せざるをえない。そしてそうした感覚は彼から次のような嘆きを引き出す。「四、五年前にアルプスを再見したときにも、私はいったい自分はそこに何を探しにきたのだらうと自問していた。ならば今日私は何を言うべきだろう。そして明日、私は何を言えばよいのだらう。そしてそれは明日になっても、果たしてわかるだらうか。年老いることができず、しかもつねに年老いつつある私はなんと不幸なことか！」(L.35, chap.11,II,p. 592)

Ⅲ テキストを造り上げる要因としての老い、死、永遠

以上見てきたように、『墓の彼方からの回想』というテキストにおいては、「老い」という主題が他者についても、自己についても、頻繁に話題にされる。しかし、このテキストを仔細に観察すると、「老い」という主題、さらにこれに隣接するものとしての「死」、「永遠」という主題がこのテキストを造り上げる大きな要因として機能していることに気づかされる。まず着目すべきは『墓の彼方からの回想』というタイトルである。このタイトルによって、読者はこのテキスト全体に響きわたる声が、生者のそれではなく、死者のそれであることを知らされる。そして、序文の末尾

で話題にされるのは、自分が埋葬される予定の墓所である。この作品では、著者の誕生が語られる前に、その墓所が話題にされている。この作品に響きわたる声が死者のそれであることは、序文でも強調される。

生存中からこの『回想』の一部を出版するよう勧めてくれる人々もいたが、棺の奥底から語りかけるほうが私は好きだ。そうすれば、墓から発するゆえに何がしか神聖な抑揚が私の語りに随伴してくれるだろう。〔…〕生は私には似合わない。たぶん死のほうが似合いだろう。
(序, I, pp. 111-112)

そのうえ、この『回想録』を語る語り手は、つねに死の影に敏感であり、生きている者たちが死に脅かされていることを語り続けずにはられない。同時代随一の彫刻家カノーヴァに会ったことを述べた彼は彫刻家のその後の死去を語り、次のように付け加える。「死はいつも人間の傍らにいて、永遠に聖バルテルミーの虐殺を続けようとし、その矢で私たちを倒そうとしている。」(L.29, chap.6, II, p. 202) 第九章で自らの王族軍への参加を語り、戦場での人々の死を語りながら、彼が付け加えるのは人々を死が脅かすのは戦場のみではないことである。「しかも、殺戮がおこなわれる野は至るところにある。パリの東墓地に行けば、二万七千の墓、二十三万の死体が、あなたの戸口で死が毎日昼も夜もどのような戦闘をしかけているか教えてくれるだろう。」(L.9, chap.15, I, p. 485)

生きている人間にはそれ以上に恐ろしいことがある。親しい人間が死ぬのは、その人間が死んだときからではない。日々別れを交わした次の瞬間から、その人間とは二度と再び会えなくなるかもしれない。「というのも、友人たちの死が始まるのは彼らが死んだときからではないからだ。私たちが彼らとともに生きるのを止めた瞬間から彼らの死は始まるのだ。」(L.10, chap.3, I, p. 504) ブリュッセルでの兄との最後の別れを語りながら、彼は続ける。「それとは知らず、私たちは永遠の別れを交わしていた。生きて

いる限り、われわれの持分は、誰もにとって現在のこの時間だけである。それに続く時間は神のものだ。友と別れば、その友とそれきり会えないという場合がつねにふたつある。われわれが死ぬか、その友が死ぬかのいずれかである。」(L.10,chap.2,I,pp. 497-498)

このように、テキスト全体が死の影を帯びるのだが、語り手のみが墓の彼方から語る死者としての相貌を帯びているのではなく、登場人物としての彼もまた生涯のさまざまな時点でほとんど半ば死者として現れる。彼の出生時については次のように記される。「生まれたとき、私は瀕死の状態だった。秋分を告げる突風によって起こされる波の唸りが、私の泣き声を聞こえにくくしていた。」(L.1,chap.2,I,p. 128) 革命の騒擾を嫌い、アメリカに赴いた彼は国王のヴァレンヌ逃亡失敗を知り帰国するが、その帰途嵐に遭い一命を失いかける。その経験については次のように記される。「難破しかけているあいだ、心が乱れることはまったくなかったが、危険が去っても何の喜びも覚えなかった。若くして人生を去るほうが、^{とき}時によって人生から追い立てられるよりはいい。」(L.8,chap.7,I,p. 430) 帰国した彼は王族軍に参加中戦闘で負傷し、叔父が居住するジャージー島にほとんど瀕死の状態で到着する「四ヶ月のあいだ、私は生死の境をさまよった。」(L.10,chap.3,I,p. 500) 叔父の負担になるのを恐れ、ロンドンで暮らすようになってからも、彼の生命はなお危険な状態にある。診察した医師の見立てでは、彼に残された生命はわずかである。この亡命期間中に書いた『革命試論』について、彼は次のように記す。「私はあの作品を死刑判決の衝撃のもとに、死刑判決とその執行のあいだに書いたのだ。」(L.10,chap.4,I,p. 507) その後、彼の生命が脅かされるような機会は多くないが、なお彼の基本的な姿勢は変わらない。彼はしばしば自分を「難破者」として描き出す。「この雑多な書き物を救済する術が私にはもはやないのだが、これが人々に気に入ってもらえるか、不快にするか私にはわからない。これは私の運命の不安定さが生み出した果実である。嵐は書きもの机として、しばしば、私を難破させた暗礁しか残してくれなかった。」

(序,I,p. 111)「自分の周りに掲げられていた数多くの難破の絵、あれらの《奉献画》を見つめていたときに、私は自分の人生の物語を読んでいるような気になった。」(L.14,chap.2,I,p. 663) 要するに彼は自分の人生を「難破から難破」へと過ぎたものとして描き出す。「私は難破から難破へとさまよい歩いた。自分の生涯にかけられた呪いを私は感じている。」(L.36,chap.1,II,p. 657)

このように語り手がつねに死について、あるいは難破者としての自己について語り続けることに加えて、老い、あるいは時間の仮借ない経過の相貌を読者に感じさせるのは、テキスト自体のなかに組み込まれた仕掛けである。その仕掛けには複数のものがある。

長い生涯を語るこの作品は、基本的に時間軸に沿って著者の誕生時から著者の晩年に向かって語られていく。したがって、ある時点で生存し、生き生きとした姿を見せていた人々が次々と亡くなっていく。このこと自体、シャトーブリアンが自らの老い、時間の経過の仮借なさを痛感する原因になる。しかも、この作品では往々にして、他者や自分が書いた書簡、他者や自分が書いた日記が素材になって用いられている。これらの素材は、語り手が語られる時間の現在時におこなっていること、現在時に感じていることを、その現在時において読者に立ち合わせるものである。こうした素材の頻繁な使用と、これまで述べてきたような老い、死についての感慨が組み合わされることによって、現在時を生きつつある登場人物の姿と、その人物が結局のところ免れえない死すべき人間としての運命の対照が読者により効果的に受け止められることになる。

第二の仕掛けとして指摘したいのは、死について、老いについて語ることが、何重にも重ね合わされていることである。母の死を伝えてきた姉ジュリーの書簡について彼は次のように記す。「私の過ちが母の最期の日々をととも苦いものとした。母は死に当たって、姉のひとりに、私とその懐で育てられた宗教に私を呼び戻すことを託した。姉は母の最後の願いを書き送ってきた。手紙が海を越えて着いたとき、姉自身、すでにこの世のひ

とではなかった。」(L.11,chap.3,I,p. 554)。ある時点で死者について語っていた人物が、その後には死者となる。共通の友人で一八〇五年に亡くなったラ・アルプの葬儀で弔辞を述べたフォンターヌの死をシャトーブリアンは公使として赴任したベルリンで耳にして悲嘆に暮れる。読者が読まされるフォンターヌの弔辞は死者によって死者についておこなわれたものなのである。古い、あるいは時間の経過についてもまた同様のことが言える。先にナポレオン期にパリからの追放令を受けてシャトーブリアンが赴いたディエップでの滞在について述べた。この時点で、彼は青年期のディエップでの滞在を思い起こし、それからその時点までに起きたさまざまなことがらについて、窓から見える海を眺めながら思い起こしていた。シャトーブリアンは七月革命が勃発したという報せをやはりこのディエップの町で受け取っている。この滞在目にする読者は、それ以前のディエップの滞在について思いを馳せずにはいられない。このように、同一の場所への滞在、同一の人間との出会いを通して、このテキストでは語られる時間の現在が次々と過去に送り込まれていく。この過程を「古い」と言い換えれば、このテキストでは「古い」の上にさらなる「古い」が次々と積み重ねられていくことになる。また『回想録』を書くという行為自体、過去の現在を過去として定着する悲哀に満ちた行為であることは言うまでもない。「若い頃に書いたものを、死の直前になって読み返すほど悲しいことはない。その当時は現在だったものが、すべて過去になり果ててしまっている。」(L.29,chap.7,II,p. 213) もちろん、こうしたことは不思議なことでもなんでもなく、人間が時間のなかで生きている以上あらゆる人間について当てはまる。だが、この『墓の彼方からの回想』というテキストでは、テキストの造り自体が、そうした事態をはっきりと目に見えるものになっている。

「古い」「時間の経過」ということについて最後に指摘しておきたいのは、それらについての記述がこのテキストでは単に過去遡及的なものではなく、未来展望的なものになっていることである。先に言及したアルトワ

伯爵のサン＝マロ訪問時において、当然伯爵は後のシャルル十世にはなっていないが、すでにそこで「シャルル十世」という名称が使われる。後に老王シャルル十世となった時点での彼について語られることで、初めて輝かしい若者としてのアルトワ伯とシャルル十世の対照が機能し始めるのではない。若いアルトワ伯について「シャルル十世」という名称が用いられることによって、この対照はすでに機能し始めている。自分をローマまで追ってきて亡くなったド・ボーモン夫人について語り始める冒頭で彼は次のように記す。「私の人生を長い悔恨の連鎖とするために、神の摂理は、私の公の経歴の当初に私を好意的に迎えてくれた最初の人物が、真っ先に消え失せる人物であるようにされたのだ。ド・ボーモン夫人は、私の前を通り過ぎた女性たちの死の隊列の皮切りとなった。私のもっとも遠い思い出は、女性たちの遺灰の上に成り立っており、彼女たちは棺を次々に連ねながら、倒れていった。」(L.13,chap.7,I,p. 627) この記述により、ド・ボーモン夫人の死は単に一回限りの彼女の死を告げるものではなく、その後次から次へと彼の前に現れては倒れていくド・キュステイーヌ夫人、ド・ノアイユ夫人、ド・デュラス夫人の死を先触れするものとなり、またすでにそれらの死を語るものとなる。友人たちについても同様である。今度はド・ボーモン夫人のローマでの死について語った後で、彼は次のように記す。「あなたを路上にひとり取り残した最初の友の思い出は残酷である。というのも、あなたが人生を積み重ねていけば、あなたは必ず他の友をも失うからだ。そのような相継ぐ死は、最初の死に結びつき、あなたは最初の友を泣く際に、同時に、あなたが続いて亡くす他の友たちの死をも泣くことになる。」(L.15,chap.7,I,pp. 711-712) 先に述べたように、友人の死が、その友と別れた瞬間から始まるのだとすれば、人生とはそれ自体が死の連なりである他なくなり、人間はその予感を抱えながら生き続けることになる。『墓の彼方からの回想』で提示されている人生とはまさしくそうしたものである。

しかし最後に忘れてならないのは、キリスト教徒であるシャトーブリア

ンにとって、死とは生の外の時間であり、神の時間であり、「永遠」でもあることである。「永遠」はさまざまな形で『墓の彼方からの回想』というテキストに刻み込まれる。それは、故郷のサン＝マロに永遠に寄せては返す波の形で姿を現すし、人間がそれを眺めることがあるか否かなど気にかけることもなく永遠に落下し続けるナイアガラ瀑布として、また太古そのままの姿を示すアメリカ北方の海として姿を現す。また人間が営々として続ける営みとしても姿を現し、たとえば先に引いた老水夫、老耕作者として姿を現す。その老水夫、老耕作者が個別の水夫、耕作者についてはなく、人類が船を操り、耕作をし始めて以来営々と続けられてきた営みについて語るものだからである。そして、往々にしてこの回想記では人間の営みについて語る著者の視線自体が永遠という視点に置かれている。青年期のアメリカへの航海を語りながら、語り手は航海中の大事件とは二隻の船の大洋上での出会いだと述べる。その様子について語った後彼は次のように続ける。「二隻の船員と乗客は、一言も発することなく、互いが遠ざかるのを見つめ合う。こちらの人々はアジアの太陽を求めて航海を続け、あちらの人々はヨーロッパの太陽を求めて航海を続ける。そしてアジアの太陽もヨーロッパの太陽もその人々がどちらも等しく死ぬのを目撃することになるのだ。大洋の上で風が旅行者たちを運び、彼らを散り散りにするよりなお速く、陸地の上では時が旅人たちを運び、散り散りにする。旅人たちは互いに遠くから合図を送りあう。《さらば、行け！》皆がすべて最後に行き着くのは《永劫》という港だ。」(L.6, chap.2, I, pp. 325-326) ここで語り手は人類史全体を俯瞰する永遠の視点に立ちながら、人間がそうあらざるをえない姿を描き出している。その永遠にもっとも近い場所にいるのは言うまでもなく老人である。彼は自分が生きている時代との噛み合いが悪いことを嘆き、自分にふさわしい人間がすべて死に絶えた後にもなお生き続ける自分の運命を嘆く。「人生の時期によって私が本来属している世紀と人々が滅んだ後に私はどうして生き残ってしまったのだろう。どうして消滅してしまった種族の最後の人々である自分の同時代人たちととも

に、私は倒れてしまわなかったのだろう。[…] 私にはもはやこれ以上生き続ける勇氣はない。ああ、せめてアフリカでかつて出会った岸辺の年老いたアラブ人たちのひとりのような無頓着さがあればいいのだが！ 脚を組んで、縄でできた小さな座布団の上に座って、頭にバーヌースを巻いて、彼らはカルタゴの廢墟に沿って飛ぶ美しいフラミンゴを目で青空に追いながら、人生最後の時間を過ごしていた。波のざわめきに揺すられながら、彼らは自分が存在することも半ば忘れ、低い声で海の歌を歌っていた。彼らはまもなく死んでゆくのだ。」(L.24,chap.17,I,p. 1261) ここで表明されている願いは、ひとり取り残されたこの世界を離れ、穏やかに永遠に合体していきたいという願いに他ならないだろう。

ただシャトープリアンという人間は、その死の間際になっても、それほど穏やかな気持ちにはなれないらしい。自らの墓の話題で始まるこの回想録は、「永遠」に合体していこうとする著者の姿を描き出して終わる。「私は、もはや自分が見ることがないだろう昇ってくる太陽による夜明けの反映を見ている。もはや私になすべきことは、自分の墓穴の傍らに座ることしかない。それから私は、十字架を手にして、大胆に永遠のなかへと降っていくだろう。」(L.42,chap.18,II,p. 1030)

『墓の彼方からの回想』は、フランスの激動の時代を、その時代を生きた多くの人物像とともに描き出しながら、死に追い掛け回されながら生きざるをえない人間の姿を永遠の視点から明晰に眺めつつ、自らもそのなかであがき続けた著者の姿を、その人生における一瞬一瞬に時としてはその現在時に寄り添いながら現出させる魅力的なテキストとなっている。